

地域の在宅医療を支える国立病院の役割 — トランジショナル・ケアを中心に —

座長 三浦久幸[†] 饗場郁子*第73回国立病院総合医学会
(2019年11月9日 於 名古屋)

IRYO Vol. 75 No. 1 (51-53) 2021

要旨

国は、超高齢社会への対応のため、地域医療構想による病床再編や、在宅医療の推進を軸とした地域包括ケアの構築を進めている。この、“病院完結型医療”から“地域完結型医療”への大きな流れの中で、今後、それぞれの病院がどのように地域医療に役割を果たすかが問われている。とりわけ、地域医療を守る公的病院としての国立病院の果たす役割は大きいはずであるが、一方で、在宅医療を中心とした地域医療に十分にコミットしているとはいえない状況にある。このため、このセッションのテーマを「地域の在宅医療を支える国立病院の役割—トランジショナル・ケアを中心に—」とし、入院中だけではなく、退院後も引き続き地域での医療・ケアの提供やアウトリーチ（トランジショナル（移行期）ケア）を実践している病院や、実際にアウトリーチ等を行っていないまでも退院後を見据えた対応を行っている全国の国立病院の多職種に実践報告を依頼した。今回のシンポジウムでは、病院からの医師を中心とした訪問診療、看護師を中心とした退院後訪問、病院からの多職種チームによる訪問医療、入院時から退院後を見据えた、病院薬剤師の役割、セラピストによる退院前訪問による早期からの在宅療養支援と、さまざまな形態による地域の在宅医療あるいは在宅療養支援の形の提示があった。地域の違いにより、それぞれの病院の役割は異なるはずであるが、いずれも病院と地域との連携を推進しつつ、入院中のより早期から、あるいは退院後も継続的に病院が支援していくことの重要性が強調された。このシンポジウムを通じ、国立病院もそれぞれの地域との連携は不可欠であること、病院内の専門職は地域の貴重な人的資源であるという視点に立てば、多職種それぞれが、地域に各専門性を還元することでさらに地域が育つことにつながり、その役割は重要であろうことが共通理解できた。

キーワード 国立病院, 在宅医療, トランジショナル・ケア

はじめに

国内の超高齢社会において、後期高齢者の増加にともなう疾病構造の変化により、慢性疾患をもちな

がら地域に暮らす高齢者が増加している。さらに、将来、自らが受ける医療・ケアの内容を決めたいという高齢者も増加している。国は、これらの状況に対応するため、地域医療構想による病床再編や、在

国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部, *国立病院機構東名古屋病院 脳神経内科 †医師
著者連絡先: 三浦久幸 国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部
〒474-8511 愛知県大府市森岡町7丁目430番地

e-mail: hmiura@ncgg.go.jp

(2020年3月18日受付, 2020年5月8日受理)

The Role of National Hospital Supporting Regional Home Medical Care : Focusing on Transitional Care

Hisayuki Miura and Ikuko Aiba*, National Center for Geriatrics and Gerontology, *NHO Higashinagoya National Hospital

(Received Mar.18, 2020, Accepted May 8, 2020)

Key Words : National Hospital, home medical care, transitional care

在宅医療の推進を軸とした地域包括ケアの構築を進めている。この、“病院完結型医療”から“地域完結型医療”への大きな流れの中で、今後、それぞれの病院がどのように地域医療に役割を果たすかが問われている。すなわち、患者の入院中のみ対応する旧来の病院の姿では、この社会の激変には対応できないと思われる。とりわけ、地域医療を守る公的病院としての国立病院の果たす役割は大きいはずであるが、在宅医療を中心とした地域医療に十分にコミットしているとはいえない状況にある。そのため、このセッションのテーマを「地域の在宅医療を支える国立病院の役割—トランジショナル・ケアを中心に—」とし、入院中だけでなく、退院後にも引き続き地域での医療・ケアの提供やアウトリーチ（トランジショナル（移行期）ケア）を実践している病院や、実際にアウトリーチ等を行っていないまでも退院後を見据えた対応を行っている全国の国立病院の多職種に実践報告を依頼した。それぞれの実践を通じた現在の課題認識や対応の方策の共有を通して、今後、国立病院が、入院治療以外でどのように地域医療に貢献にできるか、についての多職種による演者で、検討した。

NHOあわら病院循環器科の見附保彦氏は国立病院自らが行う訪問診療の実際につき報告した。NHOあわら病院は、地域と密着することを中心に在宅医療に力をいれ、2007年4月の訪問診療を皮切りに、その後、訪問看護を開始。さらには在宅医療支援病院の取得、地域包括ケア病床の取得および増床を行い、院内に訪問看護ステーションの設立とともに、在宅介護支援事業所との提携関係を構築するなど、地域に密着した在宅医療の実践を行っている。また、カンファレンスの定期開催や医療介護連携支援クラウドシステムを積極的に利用することで、医療介護スタッフのみならず家族も含めた関係者全員が情報共有し、生活の質を重視したサポートを実施している。「Hospital in the home, Home in the hospital」という概念のもと、より質の高い地域医療の完成を目指し、職員全体の力を結集して活動している。

国立長寿医療研究センターの小原淳子氏は看護師を中心としたトランジショナル・ケアの活動を報告した。国立長寿医療研究センターでは在宅医療と地域医療連携部門の組織編成が行われ、入院前評価および退院後訪問を結びつける活動を開始している。この活動の一環で、退院直後の不安定な時期に在宅

療養高齢者が不安なく在宅生活を開始し、スムーズに地域の診療チームにつなげることを目的に、在宅療養の移行期を支援する病院から地域・在宅へのアウトリーチ活動をトランジショナル・ケアと位置づけ、2017年4月から退院後訪問を開始している。ケア・チームの主な役割は、退院直後の不安定な時期に患家を訪問して、地域診療チームに結び付け在宅療養支援が継続できるよう働きかけることである。シンポジウムでは、誤嚥性肺炎を繰り返していた80代の女性に対して在宅医や訪問看護と連携を図り、再入院のリスクが軽減できた事例を中心に報告した。

NHO南和歌山医療センター 統括診療部の木下貴裕氏は急性期病院における多職種チームによる在宅医療支援につき報告した。NHO南和歌山医療センターでは、開業医と話し合いながら急性期病院の特色を活かした訪問診療を行っている。2015年に在宅医療支援センターを設置し、医師や看護師、薬剤師他の多職種チームによる訪問診療、開業医からの相談対応に応じている。希望した場合、かかりつけ医と連携しながら、医師・緩和認定看護師・薬剤師などのチームで訪問診療を数回行いながら、地域の訪問看護ステーションや開業医に紹介し、シームレスに移行できるようにするなど多面的な活動を行っている。携わったメンバーは、医師・看護師・薬剤師・言語聴覚士・栄養管理士で、それぞれの専門性を活かした診療を行っている。地域のスタッフと情報を共有のもと、チーム医療にて適切な診療が提供でき、開業医との協力関係が構築されている。

NHO名古屋医療センター 薬剤部の後藤拓也氏は入院前から退院後を見据えた“オール薬剤師”としてのトータルケアにつき報告した。名古屋医療センター薬剤部では、2016年度より病棟薬剤業務実施加算を取得できる体制となり、入院中の薬学的管理を強化することが可能となった。手術症例の休薬管理を適切に行うには入院前から関わる必要があったため、2017年度より術前薬剤師外来の運用を開始した。術前薬剤師外来では、術前休薬が必要な薬剤がある場合、主治医に確認をとり患者に休薬期間などの説明を行っている。また、手術症例以外での患者においても、薬局薬剤師が入院中の治療歴やその後の外来での経過などを確認できるよう、電子カルテ閲覧システムを導入し活用している。病院薬剤師と薬局薬剤師は緊密に連携をとり、“オール薬剤師”として入院前から退院後を見据えた薬学的なサポートが

できる体制を目指している。

NHO東名古屋病院リハビリテーション部の蕨野博明氏は在宅医療を支えるリハビリテーションの役割につき報告した。NHO東名古屋病院は、2009年度より回復期リハビリテーション病棟を開設し、脳血管障害や脊椎・下肢骨折を中心とした患者を対象として、365日リハビリテーションを行っている。入院時における患者・家族と多職種によるカンファレンスに始まり、スタッフによる症例個別のカンファレンスや各科別での退院支援カンファレンスを通じて情報共有や目標・課題に対する検討を重ね、不安なく退院後の生活を送るための援助を行っている。2010年度より退院前訪問指導を開始し、自宅で安全な生活を送れるよう評価・指導を行っている。退院前訪問指導により早期から退院後の課題を把握することで、より具体的かつ現実的な目標を共有できるようになるなど、患者・家族にとってのメリットが大きいことが報告された。シンポジウムでは、さらに実践事例が報告された。

おわりに

今回のシンポジウムでは、病院からの医師を中心

とした訪問診療、看護師を中心とした退院後訪問、病院からの多職種チームによる訪問医療、入院時から退院後を見据えた、病院薬剤師の役割、セラピストによる退院前訪問による早期からの在宅療養支援と、さまざまな形態による地域の在宅医療あるいは在宅療養支援の形の提示があった。地域の違いにより、それぞれの病院の役割は異なるはずであるが、いずれも病院と地域との連携を推進しつつ、入院のより早期から、あるいは退院後も継続的に病院が支援していくことの重要性が強調された。このシンポジウムを通じ、国立病院も、それぞれの地域との連携は不可欠であること、病院内の専門職は地域の貴重な人的資源であるという視点に立てば、多職種それぞれが、地域に各専門性を還元することでさらに地域が育つことにつながり、その役割は重要であることが共通理解された。

〈本論文は第73回国立病院総合医学会において「地域の在宅医療を支える国立病院の役割～トランジショナル・ケアを中心に～」として発表された内容を座長としてまとめたものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。